ひまわりからのメッセージ
12号
2012.3.30
西濃圏域
発達支援センター
ひまわり
発行人：中野たみ子

砂漠の国を旅して来て…

少し休暇をいただいて、遠く北アフリカのモロッコという国を旅してきました。日常のあわただしさの中で失くしそうになる心のゆとりを、非日常の数日に身を置くことで取り戻し、次の新たなエネルギーに変えたいなぁと思ったのです。

私は砂漠が好きです。砂漠で生きる人たちに出合うと何故かホッとするのです。私の中には、もしかしたら遊牧の民の血が混じっているのかもしれません。過酷な大自然の中で生まれ、その中で必死に生き、死んで大地に還っていく。生命体としてあたり前のことですが、砂漠の中で生きている人たちに接すると、人とは何なのか、命とは何なのか……と原点に立ちかえって自分の生き方を見直すことができる気がします。かつてゴビ砂漠で葬られた人の土まんじゅうが歳月を経て低くなっていくのを目にした時、まさに大地に還るということを実感したのです。それは不思議な心の安らぎでした。

モロッコの子どもたちは半日しか学校に行けません。学校の数も教師の数も少ないので午前に通う子と午後に通う子に分かれています。そして学校に行っていない間、子どもたちは荷を運んだり、ロバを引いたりして家の手伝いをしていました。写真を撮らせてお金を請求する子もいましたが、自分たちが草の葉で作った動物を買ってもらって代金を払ってもらっている子もいました。どの子もたくましく生きていました。

さて、日本の子どもたちは、大自然の中で「自分で考えて工夫してみてごらん」と言われたら、どうして生きていったらいいのか分からずに大泣きするのではないでしょうか？発達障がいといわれる子どもたちが、この広大な大地で思いきり駆けまわったら……？と想像しながらどの国の子どもたちも幸せになってほしいと心から願わずにはいられませんでした。

大垣市スマイルブックを通しての小学校との連携について

大垣市は二十二年度から「スマイルブック」と名づけたサポートブックを作成して、保護者の方に持っていただくようにしてきました。

私は、就学児の発達検査を実施した責任もあり、かかわった多くの子どもたちが小学校でのスタートを上手に乗りきってほしいと思って全ての小学校へ随行しました。

スマイルブックの引きつぎには、いくつかの意義があると私は思います。

一つには、就学前の幼児期にその子にどんな困り感があって、それをどのような支援をすることで、その子が助かってきたのかを学校の先生方に知っていただくことです。

おそらく先生方の多くは、子どもたちがどの様にして発達してきて就学を迎えるのかをご存知ないと思います。特別支援学級を担任していらっしゃっても、0歳～六歳までの発達を知った上で今のその児童の認知発達をとらえていらっしゃる先生方は多くないのではないでしょうか。

幼児期の育ちと、一人一人の児童の発達特性を知っていただくことは、学校で学習を進めていっていただく上で参考になるはずだと考えます。

近年、発達のアンバランスさがある児や、感覚や認知の特性をもつ児がふえています。「そんな子はいっぱいいますよ」と簡単に言って下さる先生方もいらっしゃいますが、本当によくわかって言って下さってるのかなあと心配になることもあります。感覚情報のうち、聴覚や視覚についてはずいぶんと知られるようになりましたが、空間認知の問題や情報処理といったことは、これからという気がします。

こういう幼児期の育ちについて、保育園や幼稚園の先生方から学校に伝えていただくのですが、園によっては、「～できるようになりました」とか「～が良くなりました」「皆と一緒にできています」など、子どもたちの育ってきたことだけを報告して下さるのですが、それでは引きつぎにはなりません。何度もくり返して遊びのルールを覚えていく園とち

がって、学校では毎日新しいことを覚えていかなくてはなりません。ですから、新しいことを覚えていく時に予測がたてにくいお子さんに、園ではどの様な支援をしてきたのかが大切なのです。そして、「有効と考えられる支援」と「今後予測される課題」を伝えることが必要です。全てを皆と一緒にできるというのであれば、あえて引きつぎなど必要はないのであって、「こんなに育ってきました。(園ではこのように育ててきました)でも、〜は心配です。その〜について気を配っていただけると有難いのです。」ということがあってはじめて、引きつぎになると思います。

引きつぎの意義の二つ目は、保護者の方の思いと自分の子どもに対する再認識です。

保育園や幼稚園の先生からの話を聞き、親としての思いや学校への要望を話す場ですが、同時に、学校に入学する前に親としておくべきこと、家庭での役割を知って、学校と家庭が手を携えていかなくてはいけないと思っていただくことが大切だと思うのです。そのためにも、今後の自分のお子さんの課題となるものを親として再認識する場でもあるのではないでしょうか?、「〜もできます」「〜も大丈夫です」と良いことや育ってきたことではなく、「〜が心配」「〜が課題」ということを、次の学校との個々の話し合いにつなげられるように、耳の痛いことも聞いておかなければなりません。

学校側は、お母さんの要望を聞いて、全てできるわけではありません。あくまでも三十数名の中の一名に、どれだけの配慮ができるかということです。保護者の方もその点を忘れて、自分の子どものことだけしか目に入らずに要求のみをエスカレートさせていってしまうと、学校との関係は悪化してしまいます。学校に考慮してもらいたいことと家庭でやらなくてはいけないことを引きつぎの話し合いを通してお母さん方が再認識していくことが必要だと思います。

三つ目は、学校側の受け止め方です。

学校によっては一人の先生が対応されるところもありますし、数名の先生が対応して下さる学校もあります。校長室での引きつぎで、さり気なく校長先生がその場にいて下さる場合もあります。先生方の対応も様々です。でもスマイルブックの引きつぎも二年目になり、入学式への事前の配慮や通学路や登校班のことなど、学習以前に子どもたち

が戸惑うであろう生活面の細かなことにも好意的に受け止めていただけるようになったと感じます。

どの学校でも、どの学年でも、発達のアンバランスさをもつお子さんはいるはずです。登校をしぶる子、長期に休んでしまう子、あるいは離席や暴言、友だちとのトラブルなど困り感からこじれて二次障がいになってしまっている子など、低学年から何らかのきざしはあったと思われるのに、それまでうまく連携がとれてこなかったケースもあるでしょう。

学校では、「スマイルブックをもっていない子の方が実は大変だということが多いんですよ」という声も聞かれました。それはきっとお父さんやお母さんが十分にお子さんのことを分かっていらっしゃらないか、あるいは分かろうとしていらっしゃらないということにつながっているのでしょう。

学校側にとっては、スマイルブックの引きつぎは、ご迷惑になる面もあるかもしれませんが、ご家族の思いを知り、今まで育ててきた園の先生方のお子さんへの愛情も汲みとっていただいて、そういった人々の願いをまた次に伝えていくという気持ちで子どもたちを迎えていただきたいと思います。

来年度、スマイルブックで引きついだ子どもたちの学校には、又、訪問したいと考えています。引きついだことがらが良かったのかどうか、実際にはもっと別の課題があったのではないか、お母さんの思いとの大きなずれや信頼関係はどうなのか…… 引きついだ者として子どもたちを見守っていきたいと思うのです。

学校に行ってからスマイルブックを作りたいと相談に来られる方もあります。保健センターの健診書類など五年位で廃棄されるものもあるようです。ひまわり学園に通っていたお子さんで幼児期の記録が欲しい方もいらっしゃるかもしれません。それぞれの機関や園に相談して、子どもの成長記録として残しておくためのデータ集めをしておかれるといいでしょう。スマイルブックはお子さんの困り感に対する支援のためのブックなのですから……。

一年間を振り返って・・・・

この一年間、あっという間に過ぎて行きました。

西濃圏域発達障がい支援センターは四年目でしたが、各市町では、それぞれ機関の連携が進んできたように思います。

発達のアンバランスさをもつ子どもたちが増え、どの市町でも他人事ではなく、真剣に子どもたちのことを考えていかなくてはならないという状況にあるということが大きな要因でしょうが、特別支援教育ということが少しずつ根づき始めていることが感じられます。そして途切れのない支援の必要性も多くの人たちが理解しはじめてくださっているように思います。

保育園では、CLM（チェックリスト・イン・三重）を使って子どもの困り感を知り、保育者としてどの様に支援していけばいいのかということが話し合われ、実践される園が多くなりました。

保健センターと保育園の連携が進み、安八町では五歳児健診がスタートしました。

神戸町では、チームを組んで園を巡回し、保育の実践を見せてもらって、支援の方法を探っていくことも始まり、神戸町スマイルブックが作成されました。

養老町では、ことばの教室の先生が中心となってのCLM研修が行われ、教育と保育の連携がはかられてきています。スマイルブックも検討中です。

大野町や池田町、輪之内町なども園の巡回や学習会などを通して連携の輪が広がっていますし、医療との結びつきを大切にしている揖斐川町や関ケ原町の取り組みもあります。

海津市では、来年度から「発達支援センター」が活動しはじめますし、大垣では、社会福祉課を中心にいくつかの連携事業が進んでいくようです。自立支援協議会の立ち上げが他より少し遅れた垂井町でも、教育委員会と他機関の連携は重要課題となっています。

センター主催でいかわクリニックの井川先生を助言者として開催するケース検討会が年六回。作業療法士の先生を講師としてお招きしたり、行動療法について学んだり……と西濃圏域の教員、保育者、療育スタッフの学びの場も提供してきました。

どれだけの方が関心をもって下さったかは不明ですが発達障がいについて少しでも学んで子どもたちに還元したいという先生方がたくさん参加して下さったことは、本当にうれしいことでした。

発達検査も多くさせていただきました。大垣市内の保育園や幼稚園のみならず、池田町、大野町、神戸町、養老町、垂井町などの依頼を受けて、園へ出向くという方式もとりました。

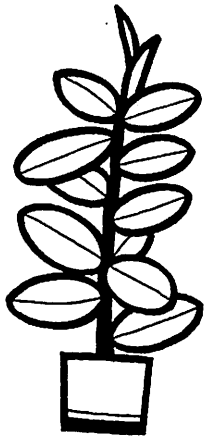
その他、園における保護者会での講演や保育者や保健師さん対象の勉強会などにお呼びいただいて一緒に学び合うこともできました。

学校でのケース会議にも多数回参加させていただきました。（余りお力にはなれませんでしたが……）

こうして一年をふり返ってみると、長いようで、あっという間だったように思います。

親の会活動はどうでしたでしょうか？毎回参加して下さっている皆さんの気持ちに添えたかどうか心配ですが、来年度も月例会と、年二回の「キッズ」の活動はつづけていきたいと考えています。

一年一年、子どもたちは大きくなっていきます。その成長に負けないように、私たちも一歩ずつ大きくなっていかなくては……と思うのです。また来年度も一緒に悩みながら考えていきましょう!!



◎お知らせ

平成二十四年度も親の会は毎月第二火曜日です。

四月は、十日(火)九時三十分～です。

どうぞ いらっしゃって下さい。お待ちしています。